



TITLE:

# 日本一のクラゲ天国田辺湾(18) スギウラヤクチクラゲ

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. 日本一のクラゲ天国田辺湾(18) スギウラヤクチクラゲ. 紀伊民報 2011

ISSUE DATE:

2011-05-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180151>

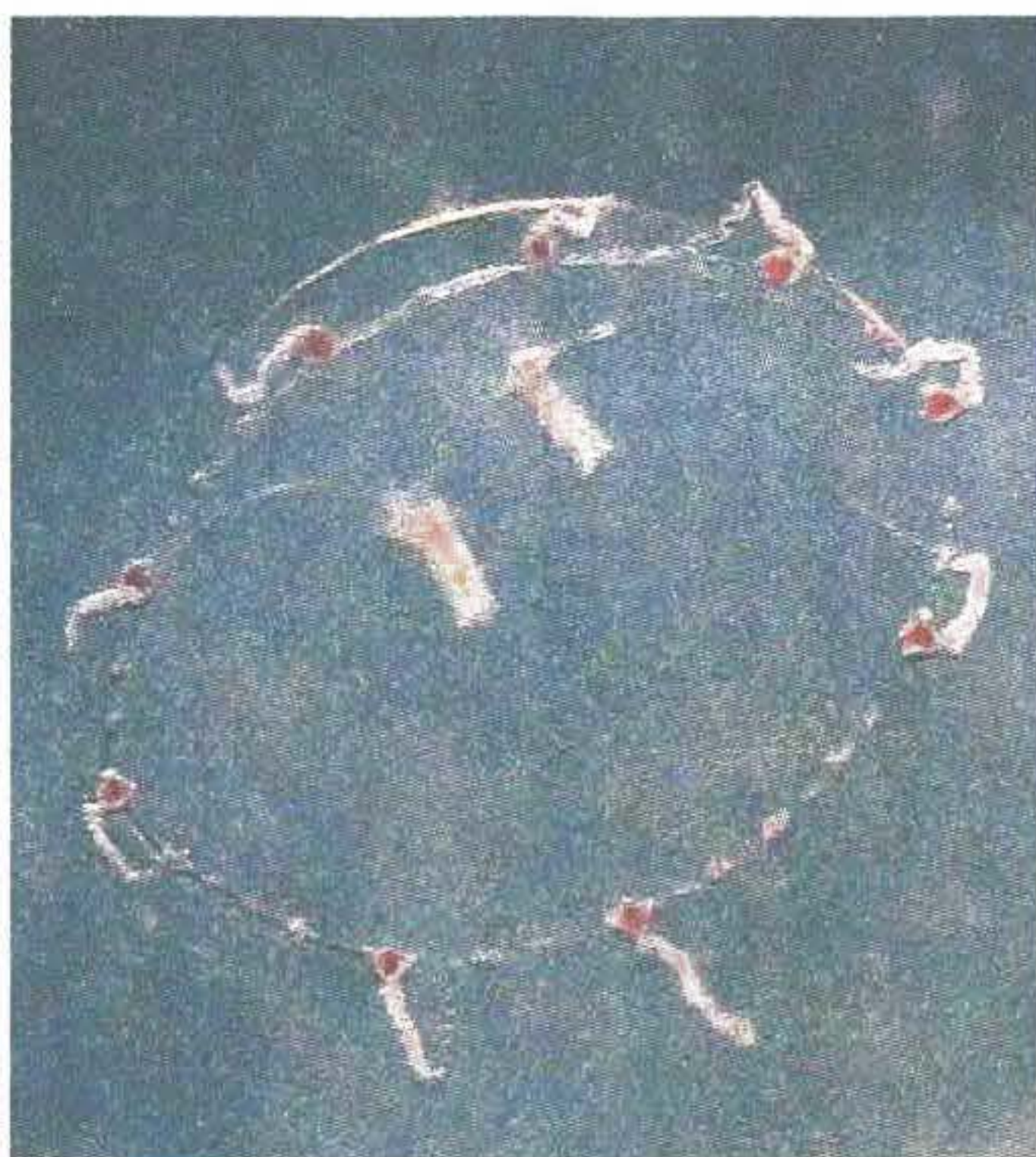
RIGHT:

© 紀伊民報社



## 紀伊民報

## スギウラヤクチクラゲ



無性生殖のために口柄を多くつくる  
スギウラヤクチクラゲ

久保田 信

18



スギウラヤクチクラゲの最も特徴的な点は、無性生殖(クローンづくり)による増殖をクラゲ時代に実施する点である。

通常、クラゲの無性生殖は若い時代のポリプが行うのだ

が、大人の体になってから分裂する不思議がある。体を次々と二つに自ら切り分け、倍々に自己増殖していくのだ。体をせっかく切り分けても獲物を食べる口柄がなければ、早晚、死んでしまう。それに見合うよう、あらかじめ二つ以上の口柄をつくっている個体が多い。中にはヤクチというくらい多くの口柄をつくり、次々と分裂していく。傘縁には多数の触手があり、これで餌を捕る。これらと交互して平衡胞があり、体のバランスを取る。傘の直径は5ミ以下ミの小型のヒドロク

ラゲで、生殖巣は分岐した不規則な放射管上に楕円(だえん)体の形状に形成される。画像の個体はまだ若く、成熟していない。このようなクラゲは日本中どこでも捕れる。ポリプは群体性で、多数の触手の間に水かき状の構造がある。しかし、それがどのように使われているのかは不明である。ヒドロ花はキッチン質のさやで覆われ、保護されている。このような姿の有鞘(ゆうしょう)類の仲間では、水かき状の触手間膜の存在は特異であり、この類のトレードマークの一つになっている。

スギウラヤクチクラゲは、鉢クラゲ類の生活史に関する研究でよく知られた故杉浦靖夫先生の名前にちなんでいる。杉浦先生がその生活史の概要を飼育により突き止められ、これまでの種類との差が明らかになったことを基に、クラゲ分類の大御所だったベルギーの故ジーン・ブイヨン先生により献名された。

(京都大学准教授)